平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27Ｋ06	氏　名	三浦　晴代
研究主題 ―副主題―	システム論的アプローチを活用した話合いにおける集団の実態把握		
所属校	品川区立芳水小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	各調査結果によると、教師は学級会がよりよい学級生活や人間関係づくりと密接に関係があると実感しているものの、問題発見のさせ方、話合いの進め方の指導、自主的な態度の育成の面で、教師が自信をもって指導しているとは言えない状況が明らかになった。これは、現場でよく耳にする、「話合いがうまく進まない」「子供に任せるのは難しい」「助言のタイミングが分からない」というような教師の不安の声と一致する。 学級活動の指導の難しさは、特別活動の特性と歴史的背景に関係する。まず、教科書がないことだ。高久（2000）は、「児童・生徒の生活活動そのものの指導を主とする方法であるから、教科書がないのは当然である」としながらも、教科書がないことは、教師の相当な指導技術が必要であるため、十分に取り組めていない実態を指摘している。次に、教師の指導性である。学級活動の目的に「自発的」という文言が明記された時から、「教師は指導してはいけない」という理解が広がった。また、昭和 33 年の学習指導要領の改訂で道徳が新設され、これ以降の学級会活動では『実践的な方法論を話し合う時間』という側面のみが独り歩きし（川本 2012）、教師の助言は、「手続き」、つまり、話合いの流れがうまくいっていない時の指導的な助言に留まり、学級内の価値を深めていく助言についてはあまり触れられなくなった。つまり、教師の力量が必要な領域であるのに、教師が授業に介入（指導）しづらい現状になっていったと言える。 そこで、今、学級会を評価し把握する教師側の指標が必要だと考える。「今、学級会で起きていること」を見る手掛かりがあることで、教師がすべきことが明確になると考え、本研究を行うこととした。
Ⅱ　研究の方法	調査対象である高学年（第４～６学年）の五学級の学級会を逐語記録に起こし、同じ話題にいて話している発言（連鎖）における、「子供」と「司会グループ」の発言、「教師の助言」を、それぞれ「発言の内容（岸田 1991）」、「助言の機能・５タイプ（橋本 1997）」を基に分類する。そして、各発言の内容の割合を出し、その割合によって、「どのような話合いがおこなわれたのか」を把握できるか検証する。次に、学級会の特性を踏まえ、重要な内容発言の三つを取り出して五学級で比較し、発表内容の割合の偏りから児童の実態把握につながる手掛かりになるか検証する。

Ⅲ　研究の結果	五校の調査結果から、45 分間の学級会では、子供の連鎖発言は 70 回位が可能であると言える。同時に 70 回程度の連鎖発言が行われていると、活発な話合いだと言える。しかし、ただ発言が多いだけではなく、話合いの実態をつかむために「提案を分析する意見」と「うら付けの意見（賛成）」と「生活化、具体化の意見」とのバランスも鍵となる。学級会で集団決定に到達するためには、相手の意見のよさに気付き、よさに対する賛成の意思表示をつないでいく必要がある。よって、意見を内容別に見た時には、「うら付けの意見（賛成）」が一番多い割合になると言えるだろう。五校の「うら付けの賛成意見」の割合を見ると、10%前後が２校、30%が１校、40%が１校、80%が一校だった。10%前後では、「うら付けの賛成意見」が話合いの中心になっているとは言い難い。また、80%となると、その他の内容がほぼ出ていないことになる。よって、50%前後の賛成意見が望ましいのではないかと考える。 そして、集団決定し実践につなげるためには、不安や課題を検討する分析発言や、自分たちの実生活に結び付ける「生活化・具体化の意見」が必要である。逆に言えば、この二種類の意見が多く出ているということは、集団決定と実施に向け、多方面から捉えられていること、子供たちが実生活とつなげて議題を捉えたり、実施時のイメージをはっきりともっていたりすると言える。そう考えると、「提案を分析する意見」や「生活化・具体化の意見」はそれぞれ全体の 10%以上出ることが望ましいのではないかと考える。五校の「提案を分析する意見」と「生活化、具体化の意見」の割合は 10%を目安に見ると、両方の割合が低いところ、片方の割合が低いところ、両方の割合が高いところとに分けられた。 教師の助言は、学級会の活性化に重要な役割を果たしている。教師の助言を大きく分けると、学級会を「活性化する助言」と「学級を統率するために必要な助言」の二種類に分けられる。この二種類で教師の助言を分析すると、教師がどのような指導をしようとしていたかが見えてくる。
Ⅳ　考察	「提案を分析する意見」と「うら付けの意見（賛成）」と「生活化、具体化の意見」の三つの内容に絞って発言を見ると、その学級会で起きていることがある程度読み取れることが分かる。三つの発言内容を追って学級会を見ると、足りている内容、足りない内容、多すぎる内容が見付かる。それが、教師の客観的な子供の発言内容の把握につながる。同時に次に指導すべきところが明確になってくる。指導すべきことに、これまで研究されてきている手法を活用していくことが、話合いの充実につながると言えよう。 教師の助言には、「活性化する助言」と「学級を統率するために必要な助言」の二種類がある。学級会を深める上で、前者の助言が重要である。教師は意識して「活性化する助言」を行っていく必要がある。